

鎌倉幕府や室町幕府は、禪宗、特に臨濟宗を重視しました。その際、寺院の序列化をはかり、五山・十刹・諸山といった寺の格を作りました。諸山までは幕府が特に重要と認めた寺院で、寺領が保護され、住職も幕府が任命しました。

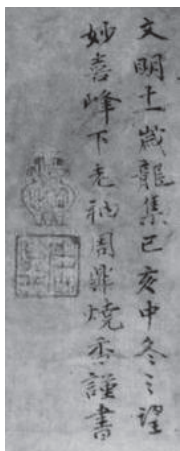
中世益田には諸山として、崇観寺がありました。崇観寺は、龍門土源を開山(初代住職)として招き、斎藤長者の妻が開基(出資者)となつて開かれたと伝わっています。永徳三(二二八三)年に益田兼見は、崇観寺を諸山にするために奔走したと置文(家訓)に記しています。崇観寺は十六世紀初め頃までに、なんらかの理由で衰退しましたが、事実上の後身として医光寺があります。

医光寺は崇観寺に隣接する脇寺であつたと推測されており、前述の兼見の置文にも記されています。益田宗兼がこの医光寺を大切にし、崇観寺に代わつて信仰を集めました。崇観寺と医光寺の連続性を示すものとして、医光寺の釈迦如来坐像があります。近年の調査でその胎内から、崇観寺仏殿の本尊として益田兼見が大檀那(出資者)となつて応安四(一三七二)年に製作したという墨書が発見されました。

同じく、諸山であつたと考えられるのが、大喜庵の前身とされる東光寺です。東光寺は山寺とも呼ばれ、益田兼見の置文には「山寺」が見えます。開山は石窓長珉です。室町中期には住職を幕府が任命していることから、諸山となつていたと思われれます。

文明六(一四七四)年に仏殿が被災した際には、その復興費用の勧進(寄附)を募る文書を堺(大阪府堺市)の海会寺の季弘大尉が書いており、重要な寺院と広く認識されていたことがわかります。

雪舟が描いた重要文化財の益田兼堯像(益田市所蔵)の上部にある賛(描かれた人を讃える文章)は東光寺の住職竹心周鼎によるものです。優れた禅僧らのネットワークの中で、雪舟も益田を訪れたのだと思われれます。



重要文化財「益田兼堯像」の賛の最後の部分。文明十一年(二四七九)年の「中冬之望(十一月十五日)に妙喜峰(東光寺)の周鼎が書いたとあり、周鼎の朱印が二つ捺してあります。」